文学の生理 文芸時評 1973~1976

川村二郎

小沢書店

文学の生理 文芸時評 1973~1976

川村二郎

小沢書店

文学の生理
昭和54年4月20日　初版発行

著　者　川村二郎
発行者　長谷川郁夫
発行所　株式会社小沢書店
東京都千代田区富士見2-5-12　Tel. 263—9218(代)
印刷　凸版印刷　製本　大口製本
© Z.Kawamura
定価1600円

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

文学の生理

読売新聞文芸時評　昭和四十八年～昭和五十一年

I

昭和四十八年一月号〜十二月号

I

ミルチャ・エリアーデという宗教学者がいる。ルーマニアの生れだが、ヨーロッパ各地で学んだ後インドに留学し、ヨガの研究で学位を取り、ブカレスト大学、パリ大学などで教え、現在はシカゴ大学教授。ハンガリー生れのカール・ケレーニイと並んで、現代の宗教学、神話学の世界で最も影響力の強い存在と思われる彼の著書は、すでに邦訳のある「永遠回帰の神話」「比較宗教類型論」などからもうかがわれる通り、驚くべき学殖によって織りなされた知識のマンダラという観を呈しており、ケレーニイが考察の深さにおいて追随を許さないとすれば、エリアーデは視野の広大さにおいて群を抜いているというべきだろう。

ところで、エリアーデは小説家でもある。しかしその小説は、あまり知られていない。その理由の一つとしては、学術的著作が、主としてフランス語、場合によって英語、ドイツ語で発表されるのに対して、小説はすべてルーマニア語で書かれているということがあるだろう。そしてこのことが、今日の文学を考える上で、きわめて意味深長であるようにぼくには思われる。

今日、知識の領域に安直な国境線を引くことは不可能である。政治経済の面でと同様に、いわゆる文化の面でもわれわれは外にさらされ、国際的な関係のもとに否応なく引き据えられている。その事実に目をつぶ

るのは強情というものであり、そして強情とは精神の怠惰の別名にすぎない。しかしこの事実を、自明の時の成り行きとしてなんの疑いもなく受け入れ、国際化すなわち文化の進展と楽観するのは、軽薄という別種の精神の怠惰にほかならないだろう。明らかにここには、知識や技術のみでは解決困難な外と内との緊張がある。文学が、外部の現実と人間の内面との微妙な対応関係を追究するものだとすれば、この緊張を、解決はしないまでも少なくとも確認することは、当然その役割となる。そこで肝要なことは、「外」にさらされることによって本来の「内」がいかなる反応を起こすかを、その「内」の側からたしかめることである。

エリアーデは学者として業績を発表する時には、いわば外にいるのだから、国際的に通用する言語を用いる。しかし、文学という言語表現が、たとえ国際的に通用するものであろうと、知識、ないし学問よりはるかに強く内にこだわり、内にこだわることを通じて普遍性を得るものであることを、おそらく彼は知っていて、それが母国語による小説の執筆になるのだと思う。

最近ドイツで発表された中編小説「ムントゥリャサ通りにて」は、カフカふうといってよい奇怪に謎めいた設定の中に、かずかずの幻想的な民話のたぐいがつづられて行く物語で、民間伝承研究の大家としての作者の面目は明らかだが、もちろん文章の息吹きは研究の場合よりはるかになまなましく、研究の広大なひろがりを下から支えるエリアーデ自身の原衝動を示すと同時に、研究ではおおむね実証的・記述的に解明される、人間と自然との神秘的交感が、ここでは強い迫力にみちた原初のイメージとして定着されているのである。

「わからない小説」というのが、最近のある種の傾向の小説に対して、嘲笑的に投げかけられる合言葉になっている。ぼくは、小説はわからないのが当然だと思っている。「わからない小説」と呼ばれる作品の傾向を、必ずしも擁護しようとは思わないが、それはわからないからではなくて、作者の単純に病的な神経や、

ことさらに異常めかした趣向や、難解をこれ見よがしに誇示する稚気などが、容易に見えすく、つまり「わかる」場合が少なくないからである。

記述的な言葉の下に潜行して、その言葉の届かぬ深みをさぐろうとすれば、この探検の消息を示す言葉は、必然的に「わからない」部分を、含むことになる。もっとも、これも安直に果される仕事ではない。下の深みにひそむ謎は、上の言葉で記述されればもはや謎ではないが、徹頭徹尾謎でしかないならば、それは表現とはいえず、したがって文学でもないからだ。この二律背反をはらんだ狭い道の上で、不可解なものをいかに言語表現にもたらすか、記述ではなく形象化によっていかに謎を解き明すか、それがおそらく文学の、最も重くかつ栄誉ある課題である。小説家エリアーデのこの課題に対する態度は、一つの範例として評価されうると思う。

そのような意味での「わからない」小説の一例に、河野多恵子の「うたがい」(文学界)をあげることができる。病んだ叔母を郷里に見舞う女が主人公で、子供のいないこの女が、たまたま道で出会った少年を自分の子だと思うことが、話の筋道をつなぐモチーフになっている。叔母の家でのこまごまを語る口調は、家庭や肉親を主題にした小説の定石通り、いかにも自然主義ふうに綿密だが、それに対して、主人公の奇妙な関心のありようは、子供を持ちたいと願う中年女のヒステリックな幻想とでも受け取られかねず、いずれにせよ、家庭小説の平面に、鋭い違和感を誘いだしながら突き立っているように見える。しかしこの場合、突き立っているのは単なる幻想ではない。親と子、血のつながり、日常の秩序を支えているその種の関係を疑い、それを自明の前提とすることによって成立している日常生活を、そもそもの前提から問い直そうとする危険な意志である。

それが観念的な記述の言葉であらわされるならば、そこに出てくるのは要するにしらじらしい謎の骨組み

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

にすぎないだろう。ここには観念はない。あるのは息苦しいまでに細密な内外のしぐさと身ぶりの叙述ばかりである。しかしそのためにかえって、叙述されたものの根底がゆらぎだし、その間隙から謎の形象がのぞき出るのではないかと、読者の心をそそる所がある。話の進行がしばしば表面的に難解になり、一人合点に陥る危さを感じさせながら、この小説から独特な重い印象の生ずる理由がそこにある。

「物語」への不信が語られるのも、昨今の文学界の注目すべき一現象である。これも曖昧な言葉だから、同じ言葉を使いながら複数の論者がそれぞれ全く別のものを心に思い浮べているということも起こりうる。さしあたりぼくの感想をいうならば、「源氏物語」あるいは「堤中納言物語」の「物語」は、今日かなり困難になっているのではないかと思う。

つまり、人生の全体をゆったりとながめ渡すとか、あるいは逆に、人生の一部をすぱりと切り取って、そのあざやかな切り口を披露するとかいった仕事は、人生の頭も尾も一向にはっきり見えてこないような場合には、なかなかもって容易ではあるまいと思うのだ。ぼくは時代に対して、不毛、荒廃というたぐいの壮大な評語をさし向けることを好まないが、ともかく現代生活が、一つの完結した形において表出されるには、あまりにとりとめなくふくらみ上っているという印象は否定しがたい。

小島信夫の新作戯曲のとぼけた題を借りるなら「一寸さきは闇」(文芸)であって、この戯曲が重苦しいファルス仕立てで示しているように、堅実な家庭生活とじだらくな快楽の夢とは表裏一体、交換可能になっていて、どちら側に何があるのか、その中に生きる人間にさえ見きわめかねるのである。

しかし「物語」といっても「今昔物語」のようなものもある。説話、民話の類。これならば、今日の文学のために、ある程度の可能性を意味すると考えていいように思う。説話の作者は人生の全体などを見ていな

い。したがってその一部を切り取ることもできない。人生はただ何かえたいの知れない大きなものとして彼らの前にあり、彼らはたまたま自分の場所で見えたものを、いわば無選択につかみ取るにすぎない。しかし見て語るという行為が、その偶然の一点において、集中的に深められる時、提示された形象がおのずから必然の輝きを帯びてくることもありうるのである。

古井由吉の短編「谷」(新潮)の冒頭には、古い説話が引かれている。この小説は学生時代からいっしょに山歩きをしていた友人の死を追悼するために、中年の男二人が山に登る話で、死んだ友にまつわるさまざまな記憶が、一見脈絡のない情景となって現われては消え、小説らしい起承転結があるわけでもない。しかし冒頭の、髑髏が舌を動かして読経しているという、説話のイメージの不気味さとなつかしさが、その後につづく情景のすべてに滲透している。死は恐ろしく、それに直面することは生きている人間にはほとんど耐えがたいのだが、まさしくそれゆえに、これに直面した人間の心には、慰めるすべもないものをあえて慰めようとするせつない衝動が生れる。この心の微妙な消息が、ここでは官能的といってもいいほど柔軟な、一種の古色をたたえた文体によって暗示されている。

ただしこの文体は、集中力を欠いた場合には、とりとめもない情緒に拡散しがちな危険があって、鬱病患者とその愛人との心中を扱った、同じ作者の「弟」(文芸)は、部分的に独特なイメージの喚起力がうかがわれはするものの、道具立てがこみいっている分だけ、意味ありげに現代風俗をなぞったという程度の印象を避けがたい。

起承転結のメリハリが定かでない物語といえば、われわれの近代文学には私小説という独自の形式がある。形式というより、むしろ無形式と呼ぶべきだとする意見ももちろん有力だろう。だが、横に伸びひろがる物語の平面が疑わしくなっているとすれば、この無形式的形式には、その平面を縦に掘り下げる機能が潜在的

にそなわっていて、その機能が十分に発揮される時、今日の文学にとってかなり積極的な役割を期待することができるとぼくは考える。

ただ、そのために何より必要なのは、作者の目の強さである。ささやかな日常の背後に、無限大の世界を透視してしまうほどに、作者の観察眼が強烈でなければ、潜在的な機能は単なる可能性にとどまる。

今月の雑誌には、私小説系統の長老たちの作品が目白押しといいたいくらいに肩を並べているが、残念ながら、それほどの透視力のあるものは見当らない。たとえば瀧井孝作の「初めての女」(新潮)は、この老作家のエロチシズム描写が素朴でしかもみずみずしいのは一驚にあたいするが、全体としてひなびた語り物の旋律以上のひびきは感得されないし、藤枝静男の「風景小説」(文芸)は、特徴的というべき剛直な風景描写が、いささか平明にすぎる属目の叙述に流れこんでいる。それにもかかわらず、この小説の系譜が、平明な身辺の叙述に心境の吐露をまじえた感想文として絶えてしまうであろうとは、信じることができない。

雑誌の目次では創作欄からはずされている井伏鱒二の「流星騒ぎ」(群像)が、別荘に滞在している夏のあいだの「私ごと」を気ままに書きつらねた随想の形を取りながら、現代生活の底にひそむ奇妙なたよりなさ、薄気味の悪さを、実にあっさりとすくい上げているのを見ると、この方向に小説の試みを押し進める意味は、まだまだ汲みつくされていないと思うのである。

古さになずみきって平然としているのが愚かなら、古さの前で一途に恐れおののくのも、同じ程度に愚かだろう。今月ごく普通の「話(ストーリー)」として印象に残ったのは、鄭承博の「電灯が点いている」(文学界)だが、戦争末期に憲兵に追われて関西各地を逃げまわる朝鮮人が主人公で、題材からすればいくらでも暗くパセティックになりそうでいながら、ふしぎに明るい。

描写はかなり荒っぽく、野方図だが、その野方図がたくまぬユーモアをかもしだし、遠い昔の滑稽道中記

や悪漢小説を思いださせる所があり、そのことが作品に厚みを与えている。われわれにとっては現在しか問題でない。だが、過去とのいさぎよい断絶は、現在を貧しくする結果にしか終らない。

2

神経性書痙という病気がある。神経の故障のために手がふるえて、字が書けなくなる病気である。この病気にかかった野間宏が、「精神病質ということについて」という文章で、自分の受けた治療法の三カ条を紹介している（創樹社刊「鏡に挾まれて」所収）。その一は、不自然なペンの持ちかたをやめること、その二は、上手に書こうとしないで、他人にわかるように書くこと、その三は、字の練習はやめてむしろ震え字の稽古をすること、というものである。これを読んだ時、これこそまさしく現代文学のための治療法ではないかという気がした。

一見、ここには矛盾があるように見える。つまり一は、手がふるえてもあくまで普通にペンを持てというのだから、病気に甘えず健康人と変らぬ態度をつらぬけという意味になるだろう。それに対して三は、手がふるえるならふるえるままで書け、病気に逆らわず身をゆだねよという教示になろう。しかしどうやらこれは、同じ志向の表と裏であるらしい。

野間氏は、三カ条のうち特に第三が非常に重要であることを知ったといい、「震え字のなかから一挙に自分を切りはなそうとしてもできるものでなく、むしろ震え字のなかに自分を突き入れてゆくことによって逆に抜けだすのである」と語っている。

現代文学の世界には、病気、異常、倒錯、畸型といった、まがまがしげなものがみちている。百鬼夜行のさまと、見る人には見えるだろう。鬼が横行するのは世が乱れているせいなのだから、出てきたことを鬼にむかって非難するには当らない。文学は、どのような形を取ろうと、それが生れた時代の現実をうつし出すものであり、時代の傾向を正したり批判したりすることが、その本来の務めではないからだ。問題は、いかによくうつし出すかである。この点を考えれば、現在横行している大半は、真実の鬼よりも、人をおびやかす鬼面のたぐいにすぎぬといわざるを得ない。

野間氏は先ほどの文章で、今日すべての人間が精神を病む可能性を持っていることを述べ、肉体と同様に精神も病むものであり、もし精神が病気にならないとしたら、それはそもそも精神などというものではないと極言している。ぼくが鬼面と呼ぶのは、このような思考の文脈で、精神が「病気」になることだけにこだわり、病むのが「精神」であることを忘れているかのような作品の表情である。病気や異常を何か新奇な意匠のように心得て、そこに必ずひそんでいる健康への欲求が、いかに苦しく重いかを、あっさり見落す楽天性である。

しかしこれを克服できるのは、病気と何の関係もないと自負する一面的な健康ではなく、病気にあえて身をゆだね、震え字を書くことによってそこから抜けだそうとする、持続する強い意志だろう。その意志が表現を取る時、たとえば野間氏の大作「青年の環」、特にその後半部のような、震え字の傑作が生れることになる。

不具の肉体、畸型は、病んだ、あるいは異常な精神の比喩として、古くから小説の好んで扱ってきた素材である。たまたま今月は、小人を主人公にした小説が二編目にとまった。本田元弥「小人のランニング」(文芸)と津島佑子「壜のなかの子ども」(群像)。「小人のランニング」は、どう努力してもうだつの上らない

中年の下級会社員が、次第に小さくちぢんで行く話、といえば説明するまでもなく現代の寓話である。文章はしばしば無神経といいたくなる程度にあらく、こまやかな心理描写などとはおよそ無縁だが、そのあらさには奇妙に土くさいユーモアがあって、それが非現実的な話をとにかく先へ先へと押し進め、異常な状況の輪郭を太い線で描きだす力になっている。しかし最後で主人公が極端に小さくなり、ついに虫めがねでも見えなくなってしまう、となると、深刻めかした馬鹿話の感は覆いようがない。

馬鹿話なら馬鹿話でもいいのである。スウィフトの「ガリバー旅行記」とかカフカの「変身」とか、まさしく怪物的な小人を主人公にしたギュンター・グラスの「ブリキの太鼓」とか、世界の文学にもだぼらめいた馬鹿話は事欠かない。非現実的なだぼらを語る言葉が、いかほど現実に対する苦い執着によって重くされているか、その重さがこの種の文学の位階を決定する。それが軽ければ、小人はただのグロテスクとなり、現代管理社会における人間性喪失、とでも要約できそうな寓話の主題は、単なる月並な公式にとどまるよりほかなくなってしまう。

「壜のなかの子ども」は、感覚的にはより繊細である。小学校三年になっても二歳程度の身長しかない男の子、生体実験を受けて畸型になった病院の動物たちを愛するその父親、同じく不具の生物に特別な興味を持つ女の子、といった人物が登場するのであれば、何やら背徳的ないかがわしい雰囲気をかもしだすにはおあつらえ向きという所だが、道具立てほどに煽情的な印象はない。

むしろ、日常の中での親子の気持の微妙な行き違いとか、生活のあてどない疲れといったものが、部分部分ではかなり感覚的にあざやかな描写によってうつしだされ、全体にやさしい生活のメルヘンとでも呼びたいおもむきがある。しかしそれならばなぜ、菓子の壜のかげに隠れてしまうほどの小さな小学生でなくてはならないのか、その父が小悪魔めいた女の子といっしょに連れて歩くのが、なぜ実験動物の、咽喉にこぶの

ある山羊でなくてはならないのか。

不具、異常の扱い方は明らかに恣意的であり、そのためにこの小説は、メルヘンとしては意味ありげにすぎ、といって寓意を探ろうとすればとりとめなさすぎるという結果に終っている。異常を書こうとするなら、「上手に書こうとしないで、他人にわかるように書く」必要がある。その努力に乏しく、個人的な感覚にたよりすぎるのが、一般に、日常の平面を超えようとする新しい作家たちの弱点である。

日常の平面を見えたままに描写することに、新しい作家たちが興味を感じなくなっているとしても、それは必ずしも作家たちの目が悪くなったせいではない。いくら目をみはろうと、その目の先に、日常の輪郭がいつになっても見えてこない、つまりその程度に日常なるものが曖昧になっているということがある。したがって作家たちが、無益な観察をやめ、むしろ目を閉じて、日常のかなたにひそむ人生の意味を幻視しようとするのも、しかるべきいわれのあることだと思う。

しかしそこで考える必要があるのは、人生の意味は、たとえどのように深遠なものであれ、小説の中にあらわれるためには、日常の諸要素で構成された形象となるしかないということである。どれほど抽象的・理念的な小説でも、小説の中の理念は、哲学論文とちがって、官能的な具体性を持たねばならず、そしてこの具体性は、日常の場におけると同じ、生活の情熱によってしか支えられない。小説の超現実性、観念性が生きるのは、小説の構成要素の現実性、具体性が説得力を持つ場合にかぎられる。

吉田知子「聖供」(新潮)は、今月第一の長編で、きわめて野心的な力作だが、このような観点からすると、その野心がかなえられているとは到底思えない。自己の周囲の一切をおのれの偏執に奉仕させようとする、老いた同性愛の男が主人公で、彼のために幾人もの少年が死に(そのうちには彼の息子もいる)、妻は狂っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.